

## 幼児の読書活動支援と保育者養成教育に関する研究

—「よるのとしょかん」の実践を中心に—

中 村 勝 美\*

(2016年1月15日 受理)

### The Programme for Promoting Reading in Pre-school Aged Children and Early Years Teacher Training: with Special Reference to Stuffed Animal Sleepover

Katsumi NAKAMURA\*

Reading is important for creating healthy mind as well as for building the ability needed for a lifetime of learning. The stuffed animal sleepover, which originated in public libraries in the United States, provides a great opportunity for promoting reading in pre-school children. The students in training for early years teacher at Hiroshima Jogakuin University carried out Stuffed Animal Sleepover for children and parents. This study shows what the students learned through this experience.

**Keywords:** promoting reading 読書活動の普及, early years teacher training 保育者養成, stuffed animal sleepover ぬいぐるみのお泊まり会

#### 1. はじめに

幼児期に図書館や読書の楽しさに触れ、読書習慣を身につけるための取り組みとして、近年、各地の図書館で幼児・児童を対象としたぬいぐるみのお泊まり会が開催され関心を集めている。国立国会図書館国際子ども図書館のホームページでは、国内の公立図書館12館の事例が紹介されているほか<sup>1)</sup>、江戸川区立篠崎子ども図書館での取り組みをモデルとした絵本『ぬいぐるみおとまりかい』（風木一人・作／岡田千晶・絵、岩崎書店、2014年）も出版された。

この活動は2008年ペンシルヴェニアで初めて行われ、その後急速に全米の公共図書館に広がったといわれている<sup>2)</sup>。インターネット等で紹介され日本でも同様の取り組みが普及しはじめた。詳細は各館によって異なるものの、基本的な内容は次のとおりである。来館した子どもたちからお気に入りのぬいぐるみを預かり、閉館後や休館日の図書館でぬいぐるみが一晩を過ごす。ぬいぐるみが本を読んだり、司書の仕事を体験したり、図書館を探検する様子を写真におさめ、後日ぬいぐるみを迎えに来た子どもたちに、写真をアルバムにしてプレゼントしたり、おすすめ絵本の貸し出しを行う。本取り組みはこのような読書体験を通じて、子どもたちの図書館や読書に対する関心を高めることを企図している。

子どもの読書活動は、言葉を学び、感性や想像力を豊かにし、表現力を高める意義がある。子どもは読書を通じて、自ら学ぶ楽しさや知る喜びを感じたり、知的好奇心や真理を求める態度が養わ

---

\* 広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科教授

れる。また、読書は社会への参画に必要な知識や教養を身につける重要な契機となる<sup>3)</sup>。したがって、読書活動を通じて感性を豊かにし、生涯にわたって自ら主体的に学ぼうとする習慣を身につけることはきわめて重要である。

他方、幼児期においては、絵本の読み聞かせを通じた子どもと読み手とのふれあいが、子どもの精神的、情緒的発達に望ましい影響を与えると指摘されている<sup>4)</sup>。

子どもの読書活動の状況を見てみると、1か月間に1冊も本を読まなかった「不読者」の割合（不読率）は、小学生4.8%、中学生13.4%、高校生51.9%と、学校段階が進むにつれ読書離れが進む傾向にある<sup>5)</sup>。小学校において不読率が低い要因として、「朝読書」など全校一斉の読書活動が9割以上の学校に普及していることがあげられる。つまり、子どもの読書活動にとって環境が及ぼす影響は非常に大きいといえよう。

幼稚園、保育所等においては、幼児が絵本や物語に親しむ機会を確保する観点から、すでに多くの取り組みが実践されている。しかしながら、広島市内において「ぬいぐるみのお泊り会」はまだ普及しているとはいえず、この活動に参加することによって、地域の子どもたちや保護者が自ら図書館に足を運び、絵本を手取るきっかけづくりになると考えられる。

他方、学生にとってこの活動は、幼児を対象とする読書活動を企画・実践する体験学習的のアクティブ・ラーニングとして位置づけられる。本稿の目的は、この実践を記録するとともに、体験的、能動的学習から学生がどのような学びを得たのかを明らかにすることである。

## 2. 研究の経過および方法

ぬいぐるみの図書館お泊まり会を授業で紹介したところ、幼児教育心理学科3年生が子育て支援サークルを結成し、お泊り会を企画することとなった。7月にお泊り会を開催、参加者に調査を実施し、11月に中・四国保育学生研究大会でこの取り組みの成果について研究発表を行ったのち、学生への意識調査を行った。

### (1) 「よるのとしょかん」の計画・立案

子育て支援サークルの学生（12名）が、大学附属図書館を主会場として、ぬいぐるみのお泊り会を開催することになった。

お泊り会は「よるのとしょかん—ぬいぐるみたちのだいぼうけん」（以下、よるのとしょかんと略記）という名称に決まり、役割分担に基づいて事前準備が行われた。役割分担は、①統括、②参加者の募集、受付担当、③読み聞かせ担当、④アルバム企画担当である。統括は③と④の担当者各1名が兼務しアルバムの作成は全員で行った。読み聞かせで音楽を使用することになり、読み聞かせ会場を図書館に隣接する光風館、お迎えの会場を図書館とすることになった。

準備の過程で、教師の助言により「広島県こども夢基金」に応募し、助成を受けることができた。そのため、読み聞かせの講師を学外より招いて会場でのリハーサルを見てもらい、絵本の選び方や読み聞かせの配慮点について指導を受けることができた。

参加者募集は、大学近隣の幼稚園3園に参加者募集チラシを配布してもらうよう依頼したほか、大学に隣接する学区の公民館2館にポスター掲示とチラシの設置を依頼した。また、大学ホームページに情報を掲載し、広島市子ども図書館にもチラシを郵送した。

## (2) 「よるのとしょかん」の実践

2015年7月18日に読み聞かせ会とぬいぐるみの預かり、7月21日にぬいぐるみのお迎えの会を実施した。

プログラムの詳細を表1に、活動の様子を写真1～8に示した。受付ではぬいぐるみの持ち主が分からなくならないように、親子とぬいぐるみの写真を撮影し、ぬいぐるみに名札を付けた。また、同伴の保護者に簡単なアンケートを行い、アルバム作りの参考とするため、子どもの呼び名や好きなもの、ぬいぐるみの名前を尋ねた。参加者は、幼児14名、保護者11名の計25名である。

読み聞かせ会では絵本だけでなく、手遊びやブラックシアターを取り入れて子どもたちが飽きないように工夫した。夜の冒険に対する期待を高め、これから何が起こるのか、子どもたちに分かりやすく伝えるための絵本や歌を選んだ。最後に預かったぬいぐるみを椅子に並べ、記念写真を撮影して解散した。

お迎えの会では、ぬいぐるみが図書館でどのように過ごしたのか、ほかの子どものぬいぐるみの様子が分かるように、写真を使って簡単な紙芝居を作り披露した。一人ひとりの子どもにもぬいぐるみとアルバムを手渡したところ、すぐにアルバムを開けて、眺める様子が見られた。

表1 「よるのとしょかん」プログラム

読み聞かせ・預かり会（7月18日）	お迎えの会（7月21日）
①受付・アンケート記入	①受付
②あいさつ・手遊び	②手遊び
③絵本『よるくま』読み聞かせ	③大型絵本『めっきらもっきらどおんどん』読み聞かせ
④ブラックシアター「おもちゃのちゃちゃちゃ」	④紙芝居（図書館でのぬいぐるみの冒険の様子）
⑤絵本『ぬいぐるみおとまりかい』読み聞かせ	⑤ぬいぐるみの返却とアルバムのプレゼント
⑥ぬいぐるみのお預かり	

## (3) 参加者を対象とする質問紙調査の実施

### 1) 調査の目的

「よるのとしょかん」の参加者（保護者）を対象として、家庭での読み聞かせや読書環境、よるのとしょかんへの参加理由や効果について明らかにする。

### 2) 調査方法・対象者

質問紙調査により行う。質問は16項目を多肢選択法、1項目を自由記述とした。調査票は参加者に直接手渡し、記入後返信用封筒に入れて回収する方法をとった。参加した親子11組に質問紙を配布し、11名から回答を得た。回収率は100%であった。（調査日2015年7月21日）

### 3) 調査票について

調査票は17項目からなり、子どもの性別・年齢・出生順位、被調査者との関係、職業について（5項目）、家庭での読み聞かせの頻度や読書環境について（4項目）、よるのとしょかんについて（8項目）に分類される。

## (4) 学生を対象とする質問紙調査の実施

### 1) 調査の目的

「よるのとしょかん」を企画実施した学生を対象として、達成度と学習成果、今後の課題について

意識調査を行う。

## 2) 調査方法・対象者

質問紙調査により行う。質問は4項目を多肢選択法、2項目を自由記述、21項目を4段階評定法で回答してもらった。調査票は対象者に直接手渡し、その場で記入してもらい回収した。サークルのメンバー12名に質問紙を配布し、12名から回答を得た。回収率は100%であった。(調査日2015年12月3日)

## 3) 調査票について

調査票は27項目からなり、「よるのとしょかん」での役割について(1項目)、活動への参加度や達成度(9項目)、活動を通して得た知識・技能(5項目)、今後の課題(6項目)に関する質問、保育学生大会に関する質問(6項目)に分類される。

# 3. 結果と考察

## (1) 参加者を対象とする質問紙調査の結果・考察

参加者を対象とする調査については、すでに中・四国保育学生研究大会において報告したので、ここでは主な結果を述べ考察する<sup>6)</sup>。

参加者の読書環境や読み聞かせに対する意識は高く、50冊以上の絵本を所有している人が64%、家庭での読み聞かせを毎日行っている保護者が46%と半数近くを占めた。

そのため、「よるのとしょかん」に参加したことによって、改めて絵本への興味や図書館への関心が高まったというよりも、「ぬいぐるみの冒険を想像して、親子の会話が増えた」、「想像力が高まる」、「ぬいぐるみを大切にするようになった」という効果があったことが分かった。

参加者の「よるのとしょかん」に対する満足度は全般的に高かったが、「読み聞かせ」よりも「アルバム」に対する満足度の方が高い傾向が見られた。また、自由記述に詳しく子どもの様子や感想、次回開催に向けての助言・要望が記載されており、活動に対する具体的なフィードバックが得られた。

## (2) 学生を対象とする質問紙調査の結果と考察

この取り組みに対し、自分がどのように関わり、達成感を得られたか、また自分自身の今後の課題をどのようにとらえたかを、1)活動の自己評価、2)学習成果、3)今後の課題の3点から分析し、結果を表2～4に示した。平均値は4段階評定の「かなりそう思う」を4点、「そう思う」を3点、「あまり思わない」を2点、「全く思わない」を1点として算出した。

### 1) 活動の自己評価

1～7の項目について、取り組みに対する自分自身の行動を4段階で自己評価してもらった。

表2 活動の自己評価

	質 問	平均値
1	必要なことを事前に考え、主体的に準備に取り組んだ。	3.08
2	同じ仕事を受け持った担当者間で十分な話し合いをした。	3.42
3	別の仕事を受け持っているグループ間および全体で十分な話し合いをした。	2.92

4	読み聞かせ・お迎え会当日は、必要なことを考え主体的に動くことができた。	3.08
5	リーダーや教師の指示に従って動くことが多かった。	2.17*
6	アルバム作りでは自分のアイデアを出したり、工夫することができた。	3.45
7	準備や当日の活動において、メンバーと協力することができた。	3.42
8	この活動をきっかけに保育者としてもっと成長したいと思った。	3.50

\* 反転項目のため、点数を逆転させて集計した。

この取り組みに対する参加度・達成度については、事前の準備は担当者間で協力できた一方、全体や部署間での連携は不十分であったことが分かった。また、リーダーの指示に従って動くことが多かったという回答が、「かなりそう思う」「そう思う」を合計して、58.3%あった。部署のリーダーとして提案・指示をする学生、全体を統括する立場にある学生がいる一方で、あらかじめ決められたことや話し合いで決まったことは積極的にやり遂げたが、計画立案の過程で主体性を発揮できなかった、あるいは周りに合わせて行動することが多かった学生もいたことがうかがえる。

この取り組みをきっかけに自分自身が保育者としてもっと成長したいと思ったかという質問には、100.0%の学生が「かなりそう思う」「そう思う」と回答しており、活動を通して今後の学習意欲を高めたことが分かる。また、個人で作成したアルバムについては、もっとも達成感を感じることができたようである。

## 2) 学習成果

1～5の項目について、取り組みを通して身につけることができたかどうかを4段階で自己評価してもらった。

表3 学習成果

	質 問	平均値
1	読み聞かせや手遊びなどの保育技術	3.25
2	イベントの企画や運営の方法	3.25
3	保護者とのコミュニケーションの取り方	2.75
4	子どもとのコミュニケーションの取り方	2.92
5	絵本の選び方や絵本の内容	3.33

学習成果としては、「絵本の選び方・内容について」が最も高い値となった。事前に研修の機会を設けたことや、実際に図書館で多くの絵本に触れ、アルバムのなかで紹介するという経験が教育効果を高めたとと思われる。また、事前の練習、リハーサルを通じて技術を向上させることができる読み聞かせや手遊びについては、学習成果を実感しやすいと思われる。

一方、保護者や子どもとのコミュニケーションについては、平均値が低くなっている。当日は受付開始よりも前に来場する人、直前に来場する人がおり、参加者によっては待ち時間が30分以上となった。そのため、待ち時間をどのように過ごしてもらうか、その場で工夫が求められたが、臨機

応変な声かけや対応ができず戸惑う学生もいた。保育実習や教育実習においては、学生は幼稚園・保育所という子どもたちが慣れ親しんだ物的、人的環境のなかで、子どもに関わっていくのに対し、今回は子どもたちにとって初めての場所で、お互いを知らない不特定多数の子どもと、短い時間のなかで学生は関わらなければならない。また、通常の実習では学生は保護者と接する機会は限られている。そのため、どのように参加者との距離をとればよいのかが分からず、積極的にコミュニケーションを図ることが難しいと感じた学生もいた。

### 3) 今後の課題

1～5の項目について、取り組みを通して今後学ぶ必要があると感じたかを4段階で評価してもらった。

表4 今後の課題

	質 問	平均値
1	読み聞かせや手遊びなどの保育技術	3.75
2	イベントの企画や運営の方法	3.25
3	保護者とのコミュニケーションの取り方	3.75
4	子どもとのコミュニケーションの取り方	3.67
5	絵本の選び方や絵本の内容	3.92

今後の課題としては、2)において各自が不十分であると感じた項目、すなわち保護者や子どもとの関わり方について学ぶ必要性を感じていることが分かった。また、絵本の選び方や内容については96.5%の学生が「かなりそう思う」と回答しており、今回の活動を通して知識不足を痛感し、さらに学びを深める必要性を感じたと思われる。

### 5. おわりに

「よるのとしょかん」には、企画する学生、参加する親子の両者をひきつける企画自体のおもしろさがある。絵本はもちろんのこと、ぬいぐるみの自撮り、写真、アルバム作りに使用したマスキングテープやスタンプ、シールなどは、女子学生や母親、幼児にとって触れるだけで楽しくなるアイテムである。また、ぬいぐるみが夜の図書館で一夜を過ごし、冒険するという設定自体にも、子どもの想像力を刺激する楽しさがある。筆者自身はぬいぐるみの冒険という設定を子どもたちが信じるのか半信半疑であったが、保護者調査からは、多くの子どもたちがこの設定について嘘かもしれないけれど本当だったらいいのと思いい、ぬいぐるみがどうしているか、あれこれ考えながら帰りを待っていたこと、アルバムの写真を眺めて冒険を追体験し楽しんだことが分かった。読み聞かせ会で、子どもたちが冒険のイメージを共有できたからであろう。

幼児の読書体験を深める取り組みを企画、運営することを通じ、学生の能動的な学習態度や学習意欲の向上を図ることができた。この取り組みは身近な実践例がなかったため手探りで準備を進めたが、その過程において学生は、受付けの仕方や個人情報取り扱い、参加者への配慮、絵本の選び方、読み聞かせや手遊びの技術など保育者として必要とされる態度や知識・技術とともに、他者



との協働、連携などの基礎的スキルを高めることができた。さらに、実習では経験できない保護者や不特定の子どもとの関わりに直面し、今後の学習課題を明確化することにつながったといえよう。地域の親子を対象とする子育て支援は保育所、幼稚園の重要な機能であり、今後、保育者となる学生にとって保護者とのよりよい関わり方を習得することは必要不可欠である。

一人ひとりの学生の成長に目を向けると、リーダーとして主体性を発揮することができた学生がいる一方で、指示を受けながら自らの役割を果たすことに専念する学生もいたように思われる。リーダー役の学生を固定せず、この取り組みを継続していくことによって、能動的な学びを多数の学生が経験できるようにすることが今後の課題である。

## 謝辞

「よるのとしょかん—ぬいぐるみたちのだいぼうけん」の実施に際して、広島県こども夢基金より助成を受けました。ここに記して感謝の意を表します。

## 文献

- 1) 国立国会図書館国際子ども図書館 子どもの本と図書館の動き (2014年, 国内), 「ぬいぐるみの図書館お泊り会」 <http://www.kodomo.go.jp/info/child/2014/2014-060.html> (2015年12月24日閲覧)
- 2) Newspoke; The Newsletter of the Alaska Library Association <http://akla.org/newspoke/2012/08/16/ketchikan-stuffed-animal-sleepover/> (2015年12月24日閲覧)
- 3) 文部科学省 2013 「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」
- 4) 秋田喜代美 増田時枝 2009 絵本で子育て 子どもの育ちを見つめる 岩崎書店
- 5) 全国学校図書館協議会 2015 第61回読書調査 <http://www.j-sla.or.jp/material/research/54-1.html> (2015年12月24日閲覧)
- 6) 中・四国保育学生研究大会運営事務局 2015 第56回中・四国保育学生研究大会発表要旨集 36-37頁



写真1 受付の様子



写真2 手遊びと読み聞かせ



写真3 ブラックシアター



写真4 冒険するぬいぐるみ



写真5 お迎えの会



写真6 アルバムのプレゼント



写真7 アルバム①



写真8 アルバム②